八年寮

タンネの はない。 る花はな 氷柱消ゆる でのなど 頃

青き希望 四_かか 牧* 場ば に結ず に羽振る若鵬の 加ぶ夢遙か の雪峯こえて

石狩を立つ意気をみん 幌るば **風に靡け** 草の影消え去り は尽きず果てもなく風に靡けつつ

Ź

友もが 真に紅く もゆる紅 ゆる紅葉をかざれの夕陽山の場 ゆくての野を遠く 四の端に ざし たる

旭光東に色め 吹雪怒りて咆ゆる夜も 十勝の峰に捲き起こるとかちみねまま

けば

つびに

熊追ふ愛奴の雄叫 無絃琴の音ぞ高 大雪原の霊光 P

> 六十の秋はしるくして キャの瞑想は来し方の 手々の瞑想は来し方の がそちのき 緑^{みど}り 若き力を求むなり むす楡鐘の哀調きけ に浮ぶ白亜城 の秋はしるくして 心方の

白石祐義君 部清 君 作 作 Ж 詇

一 の 丘^お

ば

、が芙蓉の雪とけ に烏頭咲け

の懸崖ゆくだけ入る ź

の沖の真白帆に

の波濤翔らんと

はし ば し憩ふなり

千ヶ蝦を朝き